

<p>タイトル</p>	<p>2025 年度一般入試（前期日程） 共同教育学部 教育人間科学系 小論文問題 1</p>
<p>評価の ポイント</p>	<p>【評価のポイント】</p> <p>韓国の差別問題研究者であるキム・ジヘ氏による『差別はたいてい悪意のない人がする』のなかから、表題の「差別はたいてい悪意のない人がする」ことに触れた部分を取り上げて出題した。このなかでは、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「私は他人を差別していない」と認識し、むしろ、移住者や障害者に寄り添い、誉めたり、励ましたりしようとしている人でも、本人の自覚がないまま、移住者や障害者を差別する意識を有していること ・他者に対して「真に平等」に接したいと考えるのであれば、当事者から話を聞くなどして、自分のなかに存在する無自覚の差別意識と向き合うことから始める必要があること <p>などが指摘されている。これらの点からは、「差別する他者」を批判するのではなく、「差別する自己」と向き合うことから差別問題の解決を図ろうとする筆者の姿勢を読み取ることができる。</p> <p>この論考をもとに、以下の点を重視し、総合的な思考力、表現力の面から評価を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・下線部で筆者が表現している考えを、上記のような点にふれながら説明できたか。 ・そうした文章の理解に基づき、自分なりに考察をすることができたか。 ・特に、文章の理解と自分の考察に関連を持たせられているか。 ・原稿用紙の使い方、誤字脱字、文のねじれなど表現の形式面で問題がないか。 <p>出典：キム・ジヘ（尹恰景訳）『差別はたいてい悪意のない人がする一見えない排除に気づくための 10 章』大月書店、2021 年、pp.6-9。</p> <p>【解答例】</p> <p>著者は、差別に関わる言葉の収集を行った結果、自分は差別をしていない、被差別者に寄り添って平等に関わっていると考える人々ですら、マイノリティの人々からすれば「差別」と受け取られる言葉かけを行ってしまう実態を明らかにした。マイノリティの人々に「真に平等」に接するためには、被差別当事者の声を聞きながら、無意識に差別してしまっているという「自分が認めたくない恥ずかしい自分」を発見するところからしか始まらない、と著者は主張している。</p> <p>現代では、性的マイノリティや障害者、食物アレルギーなど、さまざまな分野のマイノリティや他国の文化などにおける多様性が注目され、すべての人々が共存するための社会づくりが進められている。こうした社会を目指すためには、設備や制度の充実とともに人々の意識をアップデートすることが重要であり、自分の価値観を振り返って差別的意識を改めることは多くの人々に求められる。</p>

また、著者の主張に含まれる「自分の無意識に目を向ける作業」は、自分の内面の成長にもつながると考えられる。この作業は、自分の価値観だけで物事を考えずに、他者の価値観を受け入れる、ということである。これによって自分の価値観の幅がより広くなり、他者の思考を含めた広い視点で物事を見渡せるようになると思われる。他者を思いやるという目的だけではなく、自分の内面の成長のためにも自分の思考を振り返ることは大切である。

(592 字)

タイトル	2025 年度一般入試（前期日程） 共同教育学部 教育人間科学系 小論文問題 2
評価の ポイント	<p>【評価のポイント】</p> <p>4つの教員養成大学が合同で全国の公立小学校・中学校・高校の教員 9,720 名を対象に行った調査のなかから、「教員になりたいと思った理由」を、勤務校種別にまとめたデータを取り上げて出題した。このなかでは、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校の教員は「子どもが好きだから」「あこがれる先生がいたから」などを多く挙げていること ・高校の教員は「教科の勉強が好きだから」「人に教えることが好きだから」「人を育てる仕事だから」「部活動の指導をしたいから」などを多く挙げていること ・中学校の教員は、小学校の教員と高校の教員の間間的な位置づけにあることなどの特徴が見いだされる。 <p>このデータをもとに、以下の点を重視し、総合的な思考力、表現力の面から評価を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校種による教員の特徴が十分に指摘されているか。 ・そうした校種による教員の特徴の差異が生じる理由について、自分なりに考察を展開できているか。 ・記述は、明確なものとなっているか。 ・原稿用紙の使い方、誤字脱字、文のねじれなど表現の形式面で問題がないか。 <p>出典：愛知教育大学『HATO プロジェクト 愛知教育大学特別プロジェクト教員の魅力プロジェクト「教員の仕事と意識に関する調査」』, 2016 年, p.14. https://www.aichi-edu.ac.jp/center/hato/mt_files/p4_teacher_image_2_160512.pdf</p> <p>【解答例】</p> <p>小学校は、「子どもが好きだから」「あこがれる先生がいたから」などといった、児童や教員などの人そのものに着目した動機をもつ教員が多い。一方で、中学校・高等学校は「人に教えることが好きだから」「教科の勉強が好きだから」「部活動の指導をしたいから」などといった、教科や部活動の専門性に着目した動機をもつ教員が多くなっている。</p> <p>この理由として、小学校と中学校・高等学校では、各教員に求められる教育の軸が異なるからであると私は考える。</p> <p>小学校は、児童が集団行動を学ぶ最初場であり、基本的には 1 クラスに 1 人担任制であり、担任がほぼ担当クラスの授業を受け持つ。これにより担任が児童と触れ合う場が増え、各児童の状況が把握しやすくなる。このことは、教科指導と共に児童の内面形成の指導も重要視されているためだと考えられる。</p> <p>一方、中学校・高等学校では教科ごとに担当教員が分かれ各授業の専門性が</p>

高まる。また、中学校からは部活動が始まり、放課後に部活動指導を行う教員もいる。このことから、小学校が児童一人一人と向き合い、児童の内面形成を促す教育が求められるのに対し、中学校・高等学校では教科指導や部活動指導の専門性が求められる。

今回の調査結果に違いが生じた理由は、「児童生徒の道徳性・社会性を軸にした教育」と「小学校で培われた人格に専門性を施す教育」という捉えによるものである考える。

(578 字)